

# トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム(カナダ・ガーナ) 活動報告書(6月)

平成 30 年 6 月 30 日

獣医学群獣医学類 3 年 前田沙優里

今月は今まで私が関わってきた研究がひと段落つき、3泊5日でバンフ国立公園を観光してきた。とても素晴らしい景色を堪能することができたとともに、博物館ではバイソンの繁殖計画について学ぶことができ、自分の関わる分野”繁殖”を多角的に考えることができ良かった。また、トレッキングコースにパネルが置いてあり、野生動植物について学べたり、環境保護への警告を自然に目にすることができたりと観光地でありながら、教育・啓発の場ともなっている工夫に感心したのを覚えている。

さて、今回の報告書は、ヘルパーとしてリャマの採血をしたのでそのことについて書こう。また、先日堂地先生と高山次長とお会いし、英語学習についての話題に触れたこともあり、留学9か月目となった今、私が考える”英語”について書くことにした。



写真：Banff に旅行した際、Lake Louise でトレッキングをしたときの写真。

## 1. リャマの採血

まず、この研究の目的はインターバル形式で採血をし、キスペプチンの投与前後の血清中ホルモン動態を調べる。キスペプチンとは、性腺刺激ホルモン放出ホルモンを調節していると考えられている。

次に採血方法だが、前日にカテーテルを頸静脈に通しておく。そして当日は、初めに約5mLの血液を採り、捨てたのち、10mL程採血し、チューブに保存。最後にヘパリン含有の生理食塩水を同量注入する。これを15分おきに行い、計7時間継続する。また、血液は当日中に遠心分離させて血清部分を冷凍させる。

ここまであっさりとしてリャマの採血について書いたが、そもそもリャマは日本ではあまり馴染みがないと思うので、少しリャマについても書こう。学名は *Lama glama* で、リャマやラマと呼ばれることが多い。リャマはラクダ科に属し、南アメリカの標高2000~4000m程のアンデス地方で飼われている家畜で、主に荷物の運搬用に使われている。同牧場にはアルパカもいるのだが、見分け方は体の大きさと耳の形らしい。ちなみにアルパカの毛は高級で重宝されるが、リャマはやや硬めであまり使われないという違いもあるようだ。

ラクダ科ということもあり、初めは採血を嫌がる性格のリャマを無理に保定して胃の内容

物を吐きかけてくるのではと少し恐れたが、リヤマは本当におとなしいので、余程の嫌がらせをしない限りは安心していい。においも臭くなく、性格も温厚で従順と非常に快適な作業だった。カナダの解剖の教科書には多くはないがリヤマの記載もあり、日本に比べたら身近なのかもしれない。日本ではなかなかできない良い経験ができて良かった。



写真左：カテーテルを繋いだリヤマ 写真右：リヤマの雄

## 2. 英語

まず初めに、私がカナダに来て、語学学校の先生や研究室の教授が言っていたことをお伝えしたい。「アクセントといった訛りは自国のアイデンティティであり、恥じるのではなく、誇りに思うべきことだ。カナダは移民のおかげで発展した国だから、仮に英語が上手く喋れなくてもそれを笑う人などいない。」私はこの考え方はとても素敵だと思った。小さい日本ですら、多くの方言や訛りが存在するのに、英語に存在しないはずがない。どれが間違っているとかはなく、全てが正解なのだ。日本では中学校(小学校)の英語教育をはじめ、大学受験勉強に至るまで、基本的に標準アメリカ英語だけがあたかも正解のように学習するのはどうかと思う次第だ。実際英語で会話をする際は、生まれの国や地域、個人の癖で様々な英語を耳にしなければならぬ。実用面でも多様な英語に慣れる、多様な英語を認めることは大切だ。

ここからは、私見を書いていこう。私は未だスピーキングに最も苦手意識があるのだが、私がスピーキングの心構えとして大切だと感じるのは、伝えようとする事だ。当たり前のように思うかもしれないが、私はこれが本当に大事だと認識している。カナダという、外国人に優しい国民性の国にいるから余計に感じるのかもしれないが、英語が第一言語の人やネイティブ並みの人は話す相手に合わせた配慮をしているように強く実感する。英語があまり得意でない人相手には速度を落として話したり、言い回しを簡単にしたりする。私はよく、どんな研究をしているのか聞かれるが、同じ研究室の人には専門用語を使って説明するものの、他の人には極力簡単な単語に置き換えて説明するようにする。これは日本語でも同様で、あくまで話す際の言語は相手や聴衆に何かを伝えることが目的なので、伝えることができなかつたら、どんなに滑らかに話しても、どんなに難しい表現を使っても”話す”という点

では意味がないのだと思う。

日本ではあたかも英語が話せることが一種のステータスのような風潮があるが、私が留学して気付いたのは、あくまでも英語はツールであるということ。もちろん、英語をかつこよく話せたらとても良いとは思いますが、主要言語のひとつである英語で国外の情報を得られる読解力や、いろんな国の人と心を通わせられるだけの聞く力、伝える力、世界に情報を発信できるだけの書く力が新しいことの学びや経験、自分の視野を広げるのにとっても重要だと気付いた。日本で普通に生活する分には英語が上手に話せる必要性などあまりないと思う。むしろ、知識や知恵をいかに持っているか、自分の意見をことばにすることがどれだけ上手かの方が余程大事だ。次によりやく英語で表現する際のもどかしさを克服する段階になると思っている。私はこれからも英語学習を継続していくつもりだが、それ以上に自分の日本語の表現力を鍛え、多種多様な知識を身につけることにも尽力していきたい。そして日本人としてのアイデンティティを大事にしつつも英語というツールを利用して、様々な世界に触れて、更なる知識や経験の取得に繋げたい。

カナダでの留学も残すところ1か月となった。多くの人に優しくしてもらい、助けてもらい、ここまで不自由することなく自分の好きなことをして過ごすことができた。毎日が発見や学びの連続で、世界中の研究者と共に活動させてもらうことで多くの刺激を受けてきた。この環境に身を置けることに感謝しながら、残り1月を有意義に過ごし、次のガーナでの留学および帰国後の活動へと活かしていきたい。